

第五話

経基射鹿給事

『前太平記』上 卷第一 二十四頁から二十七頁より

[貞観殿の御遊]

承平二年の秋ごろ、一つの不思議な出来事があった。天皇は幼くいらっしゃるので、御遊のためとって、貞観殿のお部屋に山を築かせ、季節に調和した木草を残り

貞観殿の御壺に山を築かせ、

折りに触れたる木草、

らず揃えて植えさせなさる。いつもそちらにお出かけになった、四季の移り変わり

数も尽くして植えさせらる。

を御覧になられ、非常に面白がりなさる。ちょうど秋の半ば、帝が退屈でいらっ

御徒然にや有りけん

しゃった時であろうか、上達部や殿上人が多く御前に参上した時におっしゃられたことは、「季節の移ろいの中で、春秋は特に秀でていて、はるか昔から優れた和歌にも多く読まれている。それでもやはり、この二季の中でどちらが優れているとするか」と、御下問があったので、左中将の実嗣が申し上げられたことは、「春秋の争いに、昔から秋に心を傾ける人は数多くいます。それだから古い歌に、

花も見た。紅葉までも見た。虫の音さえも声々に囁きあう。だから秋は優れている

花も見つ、黄葉をも見つ、虫の音も、声々多く秋ぞ勝れる

などと読んでありますので、秋こそ勝っていると言えましょう」と、申し上げられたところ、「いかにもそのように思います。少し夜が寒くなって、月の光がとても

稍夜寒になりて、 月影の最

明るいところに見越しで雁が渡る様、萩の上を吹く風が身にしみ、萩の下の方の葉

さやかなるに、 み越しの雁の渡る様、 萩の上風身にしみ、 萩の下葉の色付ける程、

が色ついたころ、薄が乱れるように揺れるのも趣があり、その風情は秋こそ優れて

薄尾花の擾れ合ひたるもをかしく、 物の哀れが秋こそ勝り候へ」

います」と、口々に申し上げられた時、大きな牡鹿が築山の陰から躍り出て、地面

築山の陰より踊り出で、

に舞い落ちた紅葉にじゃれた様子は、猿丸太夫^式が歌ったであろう、歌の情趣もこ

散り敷く紅葉に戯れしは、 猿丸太夫の詠じけん、 歌の余情も斯くやらん、

のようであったろうか(と感じられ)小倉山の風景^参は今ここに映し出した眺めなの

小倉山の風景を、 今茲に移し出だせる眺望かと、

かと、御遊の興を加えられ、初めのころこそ素晴らしく風流なことに思いなされた

※※※訳の引用・スクリーンショットなどは、作品名及び本サイトのURL（月下庵/<https://gekkaanzentaiheiki.wixsite.com/mysite>）をご記載いただけましたらご自由にさせていただいて結構です。※※※

御遊の興を添へられしが、 始めの程こそあれ、 珍しくも面白き事に思い給ひしが、

が、だんだんなんとなく恐ろしく(感じられてきた) また、どこから来ることの出

次第に何となく恐ろしく、 又 何くより来たるべき

来る道もないため、奇怪な気がして、(鹿が) 駆け出したので、帝は幼い御心で、

道もなきに、 けしからぬ様して 駆け出でたれば、 主上は幼き御心に、

絵に描いたもの以外は、まだ一度も御覧になられたこともないので、「ああ、恐ろ

絵に描けるより外は、 終に御覧ぜられし事も無ければ、

しい。どのようなものだ」と言って、怯えなさると、「人はいますか。あれを追い出して進ぜなさい」と声々に呼びつけなさる。場所は常寧殿の北にいたので、外衛の侍は一人もいません。鹿は勇ましく駆け上がり、帝のお近くまでとびかかろうとした。若い殿上人たちは、慌てふためき、我も我もと太刀を抜いて切り払いなさると、剣に恐れたのだろうか。南の庇に飛び上り、常寧殿の棟に座って、皇居を睨んでいた

[経基鹿を射る]

そもそも、宮城の十二門はすべて、兵が戟を手に持ち、並んで守り、ずっと不測の事態を用心していることであるので、天を飛ぶか、地にもぐるかしないと、どう

長に非常を誠むることなれば、 天をも翔るか 地をも潜らずば、

※※※訳の引用・スクリーンショットなどは、作品名及び本サイトのURL (月下庵/<https://gekkaanzentaiheiki.wixsite.com/mysite>) をご記載いただけましたらご自由にしていただいて結構です。※※※

してここに入ることが出来るだろうか。いや、できるわけがない。昔も今もない珍

争でか爰に入ることを得ん。

事であると、諸卿は驚き合われたところ、摂政の忠平公が仰ったことには、「目に見えないものが災いをなすならば、不思議ともいうだろうか。鹿は足があるから、きっとどこからか入ることが出来よう。不思議ということにするには物足りない。弓術に秀でている者に、あれを撃たせましょう。誰かいますか」と、お呼びになられたところ、経基王がいらっしゃったので、つとこちらに参上なさる。忠平は「これこれのことがあるのだ。鹿をお射止めできるだろうか」と、おっしゃられたところ、異論に及ばず承って、すぐに弓と矢を取り寄せて、例の所に行きつき、あの鹿の様子の際を狙うようにご覧になると、いかにも普通ではなく、上下の牙を生え違

何様にも尋常ならず、 上下の牙生い違ふて、

わせて（交差させて）、口は耳の根まで裂け、水晶のような顔には血を注いだかの

口は耳の根まで裂け、 水晶の面に血を洒ぎたる如き眼にて、

ような目で、四方を見渡し、隙あらば御殿の中に飛び込むに違いない面持である。

四方を見廻し、 隙あらば御殿の中に飛び入りぬべき気色なり。

「やはり曲者であるな。もしも私の姿を見れば、逃げてしまうだろうか。射損ねたようでは、この時の恥辱のみならず、末代までの不名誉である」と、貞観殿の階段の下に座り隠れて、弦を少し湿らし、鏑矢をつがえ、あの鹿のいる場所を十分に気

※※※訳の引用・スクリーンショットなどは、作品名及び本サイトのURL（月下庵/<https://gekkaanzentaiheiki.wixsite.com/mysite>）をご記載いただけましたらご自由にしていただいて結構です。※※※

を付けてよく見て、少し弓を引きしぼって、狙いを定めてひゅっと放つ。その矢は少しも狙いを外さず、左の胸先から右の耳の根まで、白い矢先を射出したので、ど

左の草分より右の耳の根まで、 鏝白く射出だしたれば、

うして少しでも堪えることが出来るか、真っ逆さまに転び落ちる。摂政をはじめと

争でか暫しも怵ふべき、

し、三公九卿^(肆)の家々の武士や内侍、命婦の女官に至るまで、「おお、撃ったぞ、撃ったぞ」という声に、御殿も揺れ動くほどである。その後、この時の鹿を淀川の

其後件の鹿を淀の川瀬

浅瀬に柴漬^(伍)にしてしまった。すぐに斎部卜部の両家にお命じになって、色々な

に柴漬にぞしたりける。

御払いをして、穢れをお清めになった。

その頃の人の噂で、「鹿は春日大明神^(陸)の使いであるというのに、今このような妖怪となったことは、きっとあの一族（？藤原か？）の中に朝廷に逆らい申し上げる者がいるのだろうか」と囁きあっていたが、案の定思い知らされる世となってしまったのだった。

注釈

※壺・左中将……左近衛府の次官。

※貳・猿丸太夫……「奥山にもみぢふみわけ鳴く鹿の声聞く時ぞ秋は悲しき」（『古今和歌集』秋上・215）

※参・小倉山の風景……「小倉山峰のもみぢ葉心あらば今ひとたびのみゆき待たなむ」（『拾遺和歌集』雑秋・1128）

※肆・三公九卿……三公は大臣・左大臣・右大臣、のちに左大臣・右大臣・内大臣の総称。九卿は公卿のこと。

※伍・柴漬……罪人を簀巻きにして水中に投げること

※陸・春日大明神……春日神社でまつる神。祭神は、武甕槌命・経津主命・天兒屋根命・比売神。武甕槌命は鹿に乗っているとされ、藤原氏の守護神とされる。

経基王の初の活躍ですね。この話は経基王の初活躍であると同時に、本作品での初めての「武」の描写、そして次につながる伏線で話が締めくくられているのがとても興味深いです。

今回殺した鹿を「柴漬にする」という表現があります。ルビは「ふしづけ」なのですが、訳をしていた時私はちゃんと本文のルビを確認せず、「しばづけ」と読んで、「鹿のシバヅケってなんだろう…」と意味が分からなくなってしまい、なんとか正体をはっきりさせようと検索履歴が大変なことになりました。

感想・指摘・叱咤激励、随時受け付けております。Twitter やメール等でご連絡ください m(__)m

公開：2015/5/23

改訂：2021/3

海熊童子